

海がはぐくむ祈りと祭り

講師 射水市教育委員会 主任学芸員

松山 充宏 氏

はじめに

越中(富山県)の国境は、東・西・南を山、北は海で区画されています。北の海である富山湾は能登半島の内海として、古代から豊富な漁場、中世から船運の良港とされました。漁業・廻船業は自然が相手の生業であり、越中においておのずから風雨順時を祈る社寺勧請^{かんじょう}や神仏事が行われるようになりました。



1 海辺に祀られた森の神

富山県を代表する伝統祭礼である曳山^{ひきやま}は、現在21か所で伝えられています。そのうち氷見・伏木・放生津・海老江・岩瀬・魚津の6か所は港町です。この中で、岩瀬・魚津はそれぞれ諏訪神社の祭礼に曳山が巡行します。

諏訪神は信濃(長野県)の諏訪湖のほとりに祀られ、山岳・森林・狩猟を掌る神格を有したことから、大木や森を諏訪神が宿る依代^{よりしろ}として山間部、山麓部、平野部、そして海辺・水辺へと信仰が広まりました。

諏訪信仰は富山湾岸全体にみられます。特に知られているのは、航海の目印となる大ケ

ヤキを有する富山市四方西岩瀬の諏訪社です(左写真)。また常願寺川河口部に接する富山市横越には、かつて廻船の停泊した地に高さ2丈の塚を築き、諏訪塚と称した伝承が残されています。海辺にある入善町神子沢の諏訪社でも、漁獲増加を願って、漁民たちが諏訪社を勧請し、魚寄松^{うおよせのまつ}を植えたと伝えています。横越・神子沢の伝承は、諏訪神が自然物のみならず人為で作られた森林等も依代



とされるようになったことを示します。その祖型は、他山から切り出した丸太を境内に立てて祀る諏訪の御柱祭でしょう。

富山湾を生業の場とする人々は、航海・魚網の目標とする森を作り、森の木々を諏訪神の依代として崇敬してきたのです。ちなみに江戸時代初期の洪水が原因で、西岩瀬の港湾機能は神通川対岸の東岩瀬に移されました。このとき大ケヤキの諏訪社も分祀されて東岩瀬の諏訪神社が成立し、やがて曳山を出す祭礼を有するにいたったのです。

2 海と山の相互眺望

富山湾から直線距離で約14キロメートルの射水丘陵部に、射水市青井谷の経嶽山きやうがくさんがあり、山頂に越中金比羅宮えつちゆうこんびらぐうが鎮座しています。金比羅宮こんげんに祀られる金比羅権現は、江戸時代に流行した海運神です。

経嶽山に登ると、伏木富山港新湊地区に架かる新湊大橋がよく見えます。言い換えるなら、防波堤が建造されるまで海上からも経嶽山はよく見えました。海から目当てとなる山は、海を行き来する船舶関係者から崇敬されることとなります。この構図は、金比羅信仰の発信地で、瀬戸内海運の目当てとなる讃岐さぬき（香川県）象頭山ぞうずさんにある金刀比羅宮ことひらぐうと同じです。越中金比羅宮の祭祀を掌る翁徳寺おうとくじ（曹洞宗）によれば、越中金比羅宮勧請に、江戸時代に瀬戸内海運へも進出した放生津ほうじょうづ（射水市放生津町・八幡町・港町・立町周辺）の廻船商人が関与したと伝えています。つまり、経嶽山の越中金比羅宮は、讃岐金刀比羅宮の宗教景観を移入したことが分かります。

富山県東部にも、海との関わりを持つ山があります。それは黒部市・魚津市にまたがり、富山県東部のどこからでも見ることができる僧ヶ岳そうがたけです（右写真）。僧ヶ岳は、魚津市小川寺の千光寺（真言宗）の奥の院とされ、夏季に同寺から持参した大威徳明王像だいいとくみょうおうを安置して祀る信仰がありました。この大威徳明王像は、同寺の千手観音菩薩像ともに魚津市浜経田の漁師が網で引き揚げたという伝承を持ちます。僧ヶ岳は雪絵による農事暦が伝わることで知られていますが、僧ヶ岳と海を結んだこの伝承は、農業のみならず漁網を打つ目当ての山という視点での僧ヶ岳信仰が存在していたことを示すものでしょう。



3 海から出現する神仏

富山市八尾町宮腰の本法寺に、法華経28品を描いた「法華経曼荼羅図」22幅が伝え



られ、毎年8月6日に風入れと絵解きを行う法要が開かれます(左写真)。この曼荼羅図は嘉暦2～3年(1327～28)に京都で制作されたものです。寛文12年(1672)に記された修理裏書等によれば、明応年間(1492～1501)放生津の海中から出現し、越中国射水郡・婦負郡守護代であった神保氏が婦負郡楡原保にれはらのほに在った本法寺へ寄進したと伝

えられています。明応年間の放生津は、神保氏の本拠とされ、室町幕府10代將軍あしかがよしの足利義材が政変を避けて滞在していた時期です。中世の放生津は日本海沿岸部を代表する港湾都市であり、法華経曼荼羅図の海中出現伝承は、義材の京都復帰運動を前提として、京都から海路搬入されたことの神秘化を図るために付与されたとする説があります。

法華経は海と深い親近性を持つ經典として知られています。それは、海中にある竜宮に住む竜王の娘である竜女が、釈迦の教えを聞いて成仏したとする説話を含み、女人往生の典拠とされたためです。また、富山湾で観測されるしんきろう蜃気楼は、もともと竜宮城のありさまを海上に現出すると信じられてきました。これらの伝承は、富山湾海底に竜王・竜神が住む竜宮城が存在するという信仰を背景に成立したのです。

類例として、りゅうとう龍燈伝説を紹介しましょう。これは、上市町眼目の立川寺りゅうせんじ(曹洞宗)を開いた禅僧大徹宗令だいてつそうれい(1333～1408)に富山湾の竜神が帰依し、和尚の没後は毎年旧暦7月13日夜に海中から燈火を捧げ、墓前の木に掛けたという話です。龍燈の伝承は、俱利伽羅不動、南砺市安居の安居寺(真言宗)、氷見市朝日本町の上日寺(真言宗)にみられます。

氷見上日寺は観音信仰の寺ですが、その観音像も太田浜から出現した伝承があります。同様に仏像が海から出た例として、射水市白石の阿弥陀寺に安置される観音像及び砺波市芹谷の千光寺の観音像はいずれも放生津から、高岡市関町のそうじじ総持寺に安置される千手観音像は現在の庄川・小矢部川河口に位置するろくどうじ六渡寺(射水市庄西町)から出現したという伝承があります。

室町時代中期に六渡寺にあった総持寺は、永享7年(1435)9月にこの千手観音像を本尊として安置する金堂の竣工を記念して「童舞」(稚児舞)を伴う大規模な法要「舞楽ぶがく曼荼羅供まんだらく」を行いました。岩嶽寺いわくらし・石動山せきどうざんほか越中周辺の真言僧を動員して挙行了した大掛かりな法要の中で読み上げられたふじゆもん諷誦文に「浜の逸類」「毛鱗角冠、蹄履尾裙之類」の救済を謳い、海から現れた本尊に対し魚類をもさいど済度することを祈っています。

神仏が主体となって海から登場する行事もあれば、人が主体となって海から神仏を迎える行事もあります。射水市八幡町の放生津八幡宮の築山^{つきやま}行事は、境内に築山を設け、神霊・祖霊を招き祀る行事です。9月下旬に境内の東側に築山の舞台を設け、9月30日の夕方に海に向かって舟神輿を立て、神霊を迎える魂迎式を行います。招かれた神霊は築山の上に立てた依代である「ひもろぎ」(榊)に祀ります。10月2日早朝になると、「ひもろぎ」を撤し、築山上に神を象る人形5体と飾人形数体を立てて神事を行います(右写真)。夕方に人形を降ろし、幕を外してしまいます。現在では、祭礼日の夕方まで人形を撤却しないと変事があるとされています。



築山の壇上に祀られる主神と四天王のうち、主神名は時代によってさまざまに変化します。ただし、仏教世界の中心にある「須弥山」の四方を守る神とされる四天王の像は、江戸時代の記録でも名称が固定しています。四天王の配置から、築山はこの須弥山の再現であり、仏像を規則正しく配して悟りの境地を示す立体曼荼羅としてとらえることができます。もともと中世(鎌倉～戦国時代)の八幡信仰は神道と仏教が混淆する性格が強く、この築山行事も中世に起源を持つと考えられます。江戸時代に至っても築山行事の神仏混淆性が強かったことを示す史料として、このほど250年前の明和元年(1764)8月12日に作成された放生津の築山行事の祝詞を発見することができました。神道・仏教・道教などを総合した吉田神道の思想に裏打ちされたこの祝詞は、およそ90行にわたって国内の神祇3132柱ほか仏教世界の護法善神、海上を守る竜神3千柱を勧請する内容です。

世界の中心にある須弥山が祭礼の日だけ放生津に現出する様子は、放生津こそ世界の中心であるという強い意識の表れだったのでしょうか。放生津の築山は気宇壮大な宗教装置といえるでしょう。

築山行事を含む放生津八幡宮の祭礼は盛りだくさんです。放生津八幡宮の祭礼は、越中における都市祭礼として最も古く、明応8年(1499)に放生津八幡宮の神輿渡御^{みこしとぎょ}が行われていました。当時放生津に滞在中の将軍足利義材も、この神輿渡御を見た可能性があります。もともと足利将軍家は八幡宮を祖神として崇敬し、また京都では全国の曳山祭りの起源である祇園会(祇園祭)を見物する「祇園会御成」という大掛かりな行事を実施して、公家・武家の上位に立つ権威を誇示していました。

江戸時代の慶安3年(1650)、放生津八幡宮の神輿渡御に曳山が加わりました。越中の曳山として同じ笠鉾の形式を持つ高岡に次ぐ古さです。



放生津の曳山は、江戸時代前期に有力者（分限者）や寺が建造していました。江戸時代中期になると有力者が建造した曳山を各町で管理するようになり、「中町」「新町」など曳山に町名が冠せられます。江戸時代後期になると、町の人々が共同で曳山を建造管理する例も登場し、現在13本が巡行しています（左写真）。

江戸時代後期、放生津は廻船業・漁業で富裕層が増加したことを背景に、曳山の規模が拡大し、明治時代以後も富裕家の曳山負担金・寄付金は多額でした。

同じ「ヤマ」の呼称を持つ築山と曳山は、折口信夫らの研究を背景として、築山を曳山の起源とする説明が長く用いられてきました。しかし、これに対する反論が近年登場しています。曳山は祇園会の山鉦が基です。祇園会山鉦は遷却されるべき霊の依代にすぎず、祭礼終了後に破却することとなっていました。他方、築山は前述したように迎え祀る神々であり、嘉永2年（1849）放生津町役人が加賀藩へ提出した書上（報告書）に「築山飾り申さざるうちは、何日にも祭礼相済み申さずそうろう、不思議なる事ども御座そうろう」と記されています。つまり、築山を片付けないと変事が発生するという現代の言説は成立せず、もともと築山を飾らないと変事が発生するとされていたことも明らかとなりました。江戸時代後期に登場した築山の飾人形は「唐土合戦」を表現するものであり、江戸時代中期の放生津曳山に乗せる人形は、中国の王侯貴族から採用したゆえに今でも「王様」と呼ばれています。この築山・曳山に飾る2種の人形は、いずれも中国古典を柱とする近世町人文化に裏打ちされたもので、曳山・築山ともに影響を受けたことがわかります。つまり、放生津では中世起源の築山と、高岡の御車山みくるまやまを範とした笠鉦形式の曳山は全く別個に発生し、江戸時代後期になると同じ町人文化の影響を受けた形となったと整理できるでしょう。また氷見のように曳山が始まると築山が廃止された、といった相克も生じませんでした。

また、放生津八幡宮の祭礼には地域的な広がりの特徴として挙げることができます。江戸時代、放生津の町人増加に伴って八幡宮氏子区域にあたる本町10か町に隣接し非氏子区域の出町3か町が成立しました。放生津八幡宮の祭礼の中核となる行事は、「金光明最勝王経」に基づいて生きた魚鳥を供えたのちに放す「放生会ほうじょうえ」です。この行事を行う津（港）という意味で地名が放生津となりました。放生津の本町・出町の人々は、その多くが海に関わる生業に従事していたことから、放生会に象徴される海の神として八幡神とともに崇敬しました。その結果、本町10・出町3の計13本の曳山が出されるようになりました。

本町から出町へ曳山が拡大する様子は、本町が曳山を独占した高岡と対照的です。こうして、放生津八幡宮は氏子区域を超越する地域の大神である惣社の地位を確立したのです。

放生津八幡宮祭礼は、中世以来の祀り（放生会・築山）・祭礼（神輿渡御）と近世起源の祭礼（曳山や相撲）が並行して継続したことに特徴があり、このたび曳山行事は築山行事と並んで富山県無形民俗文化財の指定を受ける運びとなりました。

4 海の幸を享受する神仏事

射水市加茂中部の加茂神社で行われる「鰯分け神事」は、元日に氏子3地区が塩ブリ6本を奉納し（右写真）、これを神社の役員が1尾ずつ持ち上げ、地区名を大声で叫ぶ行事です。加茂神社周辺を含む射水市・富山市境地域は、寛治2年（1090）京都郊外の賀茂御祖神社（下鴨神社）領の倉垣荘となりました。



鰯分け神事の所作は、税は現物納付とされた時代に始まった貢納儀礼を起源としています。鰯分け神事のブリは塩ブリを用いることとされています。これは長期保存と輸送に適した処理方法です。この塩ブリは、旧暦11月下旬（現行暦なら1月初旬に相当）に鰯の高盛を神饌として奉る賀茂御祖神社の賀茂臨時祭に用いられていたと見られます。江戸時代に入り賀茂御祖神社による倉垣荘の支配が消滅すると、ブリは氏子へ配分されることとなりました。

賀茂御祖神社とともに賀茂信仰の中核をなす賀茂別雷神社（上賀茂神社）の所領として、倉垣荘とほぼ同時期に新保御厨（富山市水橋新保周辺）が成立しました。下鴨・上賀茂の御厨の供御人・供祭人（漁民）たちは、現物税の魚が取れる場所はどこを占拠してもよいと主張し「櫓棹の通ふ路浜、当社供祭所たるべし」と豪語しました。新保御厨周辺では高月保（滑川市）・魚躬保（滑川市・富山市）へ賀茂神の勧請が確認できることから、御厨の人々の進出がうかがえます。

次に、神事ではなく、寺の法会で魚を食す井波瑞泉寺の太子伝会と城端善徳寺の虫干法会（南砺市）を取り上げます。いずれも7月に行われる両寺の法要の齋（軽食）に、鯖ずし、煮物、漬物、飯が振舞われます。いずれも明治以後に始まったとみられますが、両寺の属する浄土真宗は魚鳥食を厭いません。また両寺の信仰圏である五箇山の山村部は、海から離れているため海魚を貴重としていたことから、夏を乗り切る栄養源という見かたをする住民もいるとのことでした。

5 海・川・山を行き来する人と信仰

平安時代の末、貴族の徳大寺家が皇室外戚となり、越中の知行国主となりました。徳大寺家は国衙（国庁）管理のため、摂津国の武士団で流通業に長じた渡辺党の一門を越中へ派遣しました。越中へ入った渡辺党の一門は、山間部を転住したという伝承があります。これは、渡辺党が摂津（大阪府・兵庫県）の鉾山支配に関与した多田源氏に仕えたことをふまえ、鉾脈や漆など山間資源開発を目指したためではないかとみられます。

越中渡辺党は、国衙領だった婦負郡野積保（富山市八尾町布谷）を選び定住しました。そして布谷に徳大寺家や多田源氏を外戚とする皇女が多く選ばれた賀茂斎院の御所の鎮守



であった七社を勧請しました。合わせて、野積保を水源とする井田川から神通川流域へ一族を輩出していきました。これは富山市婦中・水橋・新保地域に残されたいくつかの伝承からうかがえます。中でも井田川に面する富山市婦中町上井沢周辺は伊沢保と呼ばれる国衙領であり、越中渡辺党の初期分家とされる一門が集住し、ゆかりの八幡宮があります（左写真）。

越中渡辺党の菩提寺は曹洞宗の僧であ

る月庵珧瑛（^{げつあんこうえい}?～1347）が康永元年（1342）に富山市浜黒崎で開いた海岸寺（曹洞宗）です。月庵珧瑛は、能登（石川県）総持寺を開いた瑩山紹瑾の^{けいざんじょうきん}高弟である明峰素哲（氷見光禅寺の開山）の弟子です。月庵は野積保の東隣、^{にれはらのほ}楡原保の蟹寺にあった慈眼寺で化け蟹を退治したという伝説があります。楡原保は正平5年（1350）に南朝から渡辺党へ給付されていて、越中渡辺党との接点を見出すことができます。越中渡辺党は海浜へ進出したことは、海岸寺のある浜黒崎に隣接する水橋市江に一門を出したことからもうかがえます。同所は新保御厨と混在する地域でもありました。こうした痕跡は、中世初期の越中渡辺党が神通川河口所管も企図したのではないかという想像を掻き立てます。ただし、古代の駅家が置かれていたという岩瀬周辺に渡辺党の痕跡は確認できません。これは神通川の河口変遷による痕跡の消滅、または古代豪族がすでに拠点化していたため、新興勢力の越中渡辺党が入り込めなかったのではないかと思います。

さて、水橋市江に分かれた越中渡辺党一門は、海岸寺ではなく水橋館村で開創された極性寺（真宗大谷派）に帰依しました。摂津の渡辺党はもともと浄土宗信者でしたから、浄土信仰に帰する一門が出て違和感はありません。初代を親鸞の弟子と伝える極性寺は、館、滑川、市江、友杉、舟橋、布目、大白石、打出町と新川・婦負・射水を転住し、江戸時代に富山へ入りました。これは御厨供御人のような不定住の漁業・流通業に携わる人々

が極性寺の初期門徒であったことを示すものであり、滑川・友杉・大白石はいずれも海辺・川辺であり、かつ賀茂信仰ゆかりの地と近接しています。

極性寺は聖徳太子信仰の寺という特徴があります。聖徳太子は中世以来鉱山業・流通業の守護神とされていました。極性寺は宝徳2年（1450）井田川水源地の富山市八尾町福島へ道場を建立したと伝えられているので、門徒自身の進出はもっと早かったとみられます。福島極性寺に隣接する蔵王社（蔵王権現社）の勧請は14世紀で、主神の蔵王権現は大和国吉野の金峯山寺を本社とする鉱山神・火雷神という神格を有します。福島の蔵王社は、婦負郡・砺波郡にまたがる金剛堂山における蔵王信仰の一角をなすものでした。金剛堂山周辺には鉱脈・山間資源が多く、越中渡辺党が管理していました。金剛堂山上には、聖徳太子像と蔵王権現が安置されていたといわれます。摂津の渡辺党は太子信仰の中核である摂津四天王寺の有力な外護者であり、分家である越中渡辺党にもその意識は存在していたと考えてよいでしょう。

ここに、聖徳太子を媒介に海と山の信仰に接点が生じました。当時は道路も舗装されていない時代、重いものを運ぶのは水運が中心でした。つまり、渡辺党が山間資源の運搬を、井田川・神通川水運に頼っていたのではないかと結論付けられるのです。こうした越中渡辺党の経済活動の成果として、渡辺氏が京都で作らせ布谷の七社へ寄進した獅子頭が、布谷（紫野社）に残されています（右写真）。

江戸時代前期、井田川・神通川の流通網の存在を前提に、井田川を挟んで福島の対岸、そして野積保の北端に位置する桐山村を割いて八尾町が作られたと整理できます。八尾の町立てを主導した米屋少兵衛が、布谷の渡辺党と姻戚関係を持っていたことも見逃せませんし、金剛堂山の太子像が八尾の惣社として迎えられ、上皇太子社（現・下新町八幡社）として祀られたことが象徴的でしょう。



まとめ

今回は海から陸・山への視点、山・陸から海への視点と2種類の視点を提示しました。

視座を変えることで祭礼・行事の理解は更新されます。現地や現場を訪ね、見て聴いてお楽しみいただければ、と思います。